

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目： 若手研究(B)
 研究期間： 2007～2008
 課題番号： 19730343
 研究課題名（和文）
 フランス暴動後の移民集住地区における地域ネットワークの構築と機能
 研究課題名（英文）
 Role of Local Community Networks against Youth Riots in Paris suburbs
 declining urban districts

研究代表者
 森 千香子 (MORI CHIKAKO)
 南山大学・外国語学部・准教授
 研究者番号： 10410755

研究成果の概要：2005 年 10 月末にパリ郊外で始まった「暴動」は、フランスの移民とその子弟が抱える社会、経済、人種、宗教、文化問題の存在を露呈させる結果となったが、実際に同様の事件は 1980 年代初めから移民の集住する大都市郊外でくり返し発生してきた。本研究はこうした歴史的経緯のなかに 2005 年暴動を位置づけ、90 年代以降行われてきた一連の「暴動対策」の成果と問題点を明らかにし、2005 年暴動後に地域レベルで行われている新たな取り組みを検証し、特に行政と移民のあいだを結ぶ存在として活動を行う NPO 団体が形成するゆるやかな地域ネットワークとその機能・役割・課題の実態把握とその分析を目指す。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,700,000	0	1,700,000
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,100,000	420,000	3,520,000

研究分野： 社会学
 科研費の分科・細目：社会学
 キーワード： 都市、移民、郊外

1. 研究開始当初の背景

大都市郊外の移民集住地区で若者の集団が駐車車輛に放火し、警察と衝突するという事件は、1981 年の夏、フランス第二の都市リヨン郊外で最初に起きて以来、定期的に発生してきた。

1990 年代に入るとその数は増加し、1990

年代からとられるようになった「暴動統計」においては、90 年～2000 年に 343 回の暴動が記録された。先行研究においては、これらの暴動の大半が、警察の若者に対する職務質問や尋問に端を発していることが明らかにされた。

だが従来の「暴動」が最長でも三・四日で終結し、ある地点から他の地点へと「飛び火」

することがなかったのに対し、2005年「暴動」はフランス全土に広がり、三週間以上続き、放火車両1万台、逮捕者5,000人、被害総額6,000万ユーロという前代未聞の規模だった。

「暴動」への参加者は、かつては学業挫折して職もない若者の層に限られていたが、今回の暴動では職を持つ者や、高校・大学への進学者が多く含まれていた。新自由主義経済の影響による雇用状況の不安定化の加速と旧植民地出身者に対する根強い人種差別が原因で、成績も中程度の「普通の若者」の層にまで絶望が拡大していると考えられる。

2. 研究の目的

以上のように1980年代から移民の若者と警察の衝突が頻発してきたフランスでは、政策のレベルでも、現場のレベルでも、20年以上にわたって様々な取り組みが既に行われてきた。このような過去の取り組みの蓄積と反省をもとに、2005年11月以降、移民集住地区の現場で行われている取り組みの一例として、本研究では「地域のNPO・団体間のネットワーク」の構築と地域社会におけるその機能に焦点を定めた。具体的には、以下の三点を明らかにすることを目指した。

1) 過去の「暴動対策」の問題点と限界をめぐって、現場でどのような議論がどの程度行われているのかの検討を目指した。80年代前半は問題の現状認識自体が進んでおらず、半ば放置状態であったのが、90年代に入ると一気に政府による対策の制度化が進んでいったが、行政がこうした「対策」を押し進める一方で、地域のアクターは現場で草の根的活動を続けてきたが、両者の間には連携などがみられたのだろうか。また、その原因は何か。

2) 移民集住地区で草の根的活動を行ってきたアクターたちが、新たな試みとして、2005年11月以降に地域社会で行われている取り組みとして、地域ネットワークの構築の検討を目指した。そのネットワークの一つとして、本研究では、2005年末に形成されたパリ郊外セヌ・サン・ドニ県の移民集住地区を結ぶ「レゾー・93」を事例として分析することを目指した。

3) この「レゾー・93」がどのように機能し、またどのような課題や困難を抱えているかについての検討と考察を目指した。特に、情報交換、行政との交渉などにおける戦略などネットワークがどのような役割を果たし、機能しているのか、またアクターやNPOの連携における様々な困難や機能していない部

分にも光をあてようとした。各団体個別の忙しさによる対話の不足や組織間の力関係とそれが生み出す緊張などの分析を通し、地域の組織のネットワークが機能するための条件とは何なのかについても、考察を目指した。

3. 研究の方法

本研究は、フランスでの現地調査とその結果分析が中心的な位置を占めた。具体的には、2007年度と2008年度で各二回ずつの現地調査を実施した。場所は、研究代表者が2005年まで調査を実施し、事情によく通じているパリ北部セヌ・サン・ドニ県の団地地区に定めた。そして、事前に予備調査を行ったうえで、同県の地域ネットワーク「レゾー・93」を構成する地域の様々なアクターのみ調査の焦点を絞ることを決めた。

そして夏期と春期の授業のない期間を利用して渡仏し、同ネットワークに参加するNPOのアクターと、ネットワークと関わりを持つ行政関係者、学校関係者をはじめとする地域社会を構成する組織のアクター、また団地の住民、特に若者層を対象に聞き取り調査を行った。

調査にあたっては、現地の研究者の協力を依頼した。調査地の出身でNPOネットワークにも太いパイプを持つ、パリ社会科学高等研究院博士課程の大学院生ウルダ・ハリ氏と、イスラーム関係の宗教団体にコンタクトを持つパリ政治学院博士課程のリアド・アクル氏に、調査実施に協力してもらった。

4. 研究成果

本研究の成果は大きくわけて、以下の三点にまとめることができる。

まず、一点目として、過去に行われてきた「暴動対策」の現場における評価を明らかにしたことがあげられる。

1990年代初めから政府主導で進められた暴動対策は、失業対策などの社会統合政策と、警察による取締りの強化・厳罰化を二本の柱にしていた。これらの政策が地域社会でどう受容されているのかを検討するため、パリ北部セヌ・サン・ドニ県の行政・教育関係者、地域で活動するNPO関係者、また同県の公営団地自治会メンバーと住民に対して聞き取り調査を行った。

そこで明らかになったのは、地元住民や関係者が政策に一定の評価を与えつつも、政

策が始まる以前から現場で草の根的活動を続けていた地域アクターの経験や声が政策にほとんど反映されず、結果として現場のニーズに適した政策がとられてこなかったことや、自治体が、地元の活動と連携して活動を行おうとしなかったことに対して、強い不満と苛立ちを覚え、一部には不信感を持っていることだった。

政府が地域のアクターを、自らが定めた政策の下請け的に実施するものと位置づけたことも、地域アクターの反発を引き起こした。その結果、地域社会の核となるアクターと、行政の連携がほとんど見られなかったことがわかった。

二点目は、地域のアクターが構成するネットワークの実態と機能について理解を深めるため、2005年末に形成されたネットワーク「レゾー・93」に参加する団体やアクターに、ネットワークが形成された経緯とその実質的な機能を明らかにしたことである。

現場での活動を続けてきたアクターたちは、2005年の暴動勃発を契機として、個別で行う取り組みに限界があることを改めて認識し、よりグローバルな形で問題に対応し、働きかけていくために、ネットワークの形成を提案し、実現したということが明らかになった。

ネットワークは二月に一回の割合で定期ミーティングを開き、情報交換や共同アクションの方向性をめぐって議論を行っている。また個別のアクションを行う必要が生じた場合には、ネットワーク内で連携して行動を起こしていることがわかった。

参加するアクターに対して行った聞き取り調査では、ネットワークを構成したことによって、以前に比べ、行政やメディアなどへの働きかけが効果的になったことや、情報交換の面でも一定の成果が得られたことを評価する声が多く聞かれた。

このような利点を指摘する一方、ネットワークを構成する三十あまりの多様な組織間には、世代間のギャップや、問題意識のズレなどが存在し、それがミーティングや共同活動の際に、しばしば露見し、ネットワーク内に一定の緊張を生みだしていることもわかった。

三点目は、この地域ネットワークによってうまれた新たなる課題、困難の一部を明らかにすることができた点である。

県の外郭団体や、移民の出身地に基づいた同胞コミュニティなどの従来型組織と、近年になって移民集住地区で影響力を強めている一部のイスラーム団体などの宗教団体との間には、活動のあり方や社会観などの面で多くの相違点がみられ、これらの組織間における連携関係の基盤はきわめて脆弱であることがわかった。

特に家族や教育などといった一定のトピックスに関しては、ネットワーク内部でのコンセンサスの形成がきわめて深刻な困難に陥り、共同での行動や見解の表明などが事実上行えなくなるといった問題点も発生し、抗した問題がネットワークの機能や戦略に大きな障害となりうることも明らかになった。

ネットワークの形成が個々のアクターや団体に及ぼした具体的な影響に関しては、従来型の団体に関してはデータが集まったが、若者主導型の団体や前述の宗教団体などの「新しい形の」団体については、組織形態の脆弱さ、不安定さという問題のあることが調査を進めていく上で明らかになり、比較検討を行うだけ十分なデータが集まらなかった。これを今後の課題として、調査を継続し分析をすすめていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①森千香子「郊外団地と「不可能なコミュニティ」」『現代思想』、2007年6月号、2007、pp.174-182、査読無

②森千香子「『声なき者』の声と『没収された言葉』の奪回——移民二世の社会的排除の経験と文化をめぐって」『平和・コミュニティ研究』、3号、2007年、pp.88-96、査読有

③森千香子「祖国イランの「矛盾」とヨーロッパの「野蛮」」、『論座』、2008年1月号、2008年、pp.121-127、査読無

④森千香子、「ヨーロッパにおける文化的多様性とイスラーム」『宗教と政治のインターフェイス報告書』2009年 p.37-47、査読無

⑤森千香子「地域社会と社会学の接続のかたちと可能性」『東海社会学会年報』1号、2009年、p.53-56、査読無

[学会発表] (計5件)

①Chikako MORI « Ecritures des jeunes des

banlieues parisiennes 》, Modernités multiples. Une mise en perspective France-Japon, Maison du Japon-EHESS, Paris, 2008年3月15日

②森千香子「怒りを抑圧する「運命」. ——現代社会における「運命論的社会観」の生成——」唯物論研究会シンポジウム、2008年10月25日、首都大学

③森千香子「ポストフォーディズムにおける「先進的周縁層」の形成. ——ロイック・ヴァカンによる都市貧困層の比較社会学」日本社会学会、2008年11月23日、東北大学

④Chikako MORI, “Heterogeneity, Instability, Wasted Lives”, International Sociological Association RC21, 2008年12月19日, International House of Japan

⑤森千香子「音楽に表れる在仏アルジェリア移民の帰属意識とその変容」イスラム人口研究会、2009年2月20日、早稲田大学

[図書] (計1件)

① (共著) 内藤正典・阪口正二郎編、『神の法 VS 人の法——スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』日本評論社、2007年(担当箇所 pp. 156-180)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 千香子 (MORI CHIKAKO)
南山大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10410755